

湘南日独協会 会報

DerWind

(風)

湘南日独協会会報(Der Wind)

VOL. 16. NO. 1. 通巻92. 発行 2014. 1. 5

湘南日独協会

Japanisch-Deutsche Gesellschaft in Shonan

事務局：〒251-0025 藤沢市鵠沼石上1-1-1

江ノ電第2ビル7F

TEL0466-26-3028 / FAX0466-27-5091

新年のご挨拶

湘南日独協会会長 織田正雄

年の始めにあたり、過ぎ去った昨年一年の活動を振り返り、新たな年の活動への参考としたい。

昨年は創立15周年目にあたったので、記念行事をいくつも行い、いずれも期待を遥かに超える大成功であった。

鎌倉芸術会館でのアムゼルによる演奏会、初めての公式公演であったが、アムゼル創立から10年でここまでやるかという素晴らしい演奏会となった。

ドイツ旅行は昼・夜全部で7回ドイツ各地の独日協会のメンバーと会食することで、日独親善を百パーセント実行することが出来た。

恒例のオクトパーフェストは格段に成長したアムゼルの素晴らしい歌唱により従来に無い盛り上がりとなった。

例年の鎌倉国際フェストや藤沢国際フェストへの参加は回を重ね、日独協会の名を一般に知らしめる成果をあげてきた。そしてそれは市民にわずかでもドイツを認識してもらう良い機会でもある。

11月には当協会の初代会長現名誉会長岩崎英二郎先生縁の小岩井農場訪問も実現した。

いずれも会員各位の熱意な尽力の賜物であるが、年々会員が増えていくのはうれしい限りである。

会の会報を各地の日独協会へ送ることで湘南日独協会の活躍振りは徐々に知られてきている。全国に60近くある日独協会でもコーラス部をもっている協会は全国で湘南だけではないだろうか。

15年前の協会創立総会にはワイマール独日協会とワイマール市玉葱女王も参加し、祝福を受け、当協会は今日に到るまで、ワイマール独日協会の支援を享受する関係にある。今年秋にはワイマール独日協会のメンバーが日本に来る予定になっており、昨年我々が同協会でも受けた大歓迎に劣らぬ歓迎をしたいと考えている。

4年前に当協会が応援して設立された横浜日独協会も順調に実績を上げているのは誠にうれしく、これから両協会が協力し合って、共に発展することを願うものです。

新入会員紹介

敬称略

関口 茂雄

湘南日独協会の活動予定

■総会開催

日時 1月19日(日) 13:00~14:00

会場 江ノ電第2ビル 7F

■1月例会 総会終了後同会場 14:15~16:15

西澤英夫氏の解説による映画「エリザベト愛と哀しみの皇妃」鑑賞

会費 無料

■Singen wir zusammen!歌で楽しむドイツ語 第15回
Liebe (愛の歌) を歌います

日時 1月26日(日) 15:00~16:30

会場 江ノ電第2ビル 4F

会費 1,000円

申し込み 木原:電話 0466-26-3028

メール jdgs@jcom.ne.jp

■2月例会 講演会

「織田幹雄は世界人」

1928年アムステルダム・オリンピックの金メダリスト、1965年東京オリンピックでは運営に活躍された織田幹雄氏の口癖であった「世界人」について、子息である当協会会長織田正雄氏が語ります

日時 2月15日(土) 14:00~15:30

会場 江ノ電第2ビル 7F

会費 1,000円

終了後懇親会(別料金)を予定しています

■Singen wir zusammen!歌で楽しむドイツ語 第16回

日時 2月23日(日) 15:00~16:30

会場 江ノ電第2ビル 4F

会費 1,000円

申し込み 木原:電話 0466-26-3028

メール jdgs@jcom.ne.jp

■3月例会 講演会と展示

ホルツフィグアー(ドイツ木工)制作のお話と作品紹介
講師 飼沼聖子氏

日時 3月22日(土) 14:00~15:30

詳細は次号でお知らせします

11月例会 森涼子氏の講演会

「ライン・ロマン主義とローレライ」 に出席して

会員 小野宏子



小野宏子氏

「ライン・ロマン主義とローレライ」という演題に魅せられ足を運びました。私自身今まで知識として多少の事は知っているつもりでいたライン川やローレライの伝説は、長い歴史を経る中で変化し、発展していったものであったことを知り驚きました。

ドイツにおける知識人や民衆のライン川への思いは、1800年を境に大きく変動して行きました。つまり、それまでは普通の平凡な川、交通手段としての水路という理解に過ぎなかった川が、1800年代に入ると英国のロマン主義の影響を受け、特にロマン派の代表格であった風景画家のJ・M・W ターナー（1775年～1851年）による「ラインの風景」などの出現で、ライン川のイメージが大きく変化して行きました。ラインの船旅に関する著述で「全くつまらない風景が広がっていて、見て好ましいものではない」が、急速に「崇高で美しく、まさに絵のようだ」と書かれるようになりました。



森涼子氏

次に、先ずローレライと聞けば、ハインリッヒ・ハイネ（1797年～1856年）の詞による「ローレライ」の歌ではないでしょうか。ローレライに関する伝説では、先ず“魔女”と“こだま”の登場をイメージするのが一般的だと思いますが、これらにまつわる先生の「諸説あるお話」はそれぞれ尤もらしく楽しいものでした。紙面の都合で全てをご報告できないのは残念ですが、印象に残ったのはクレメンス・ブレンターノ（1778年～1842年）の書いた詩の内容の一部です。

— ラインの畔バハラッハに、多くの男達の心を奪った美しい魔女が住んでいた。恋人に裏切られ、切り立った険しい岸壁を登り岩の頂きに立ってライン川を見下ろせば、川面に小舟が一艘、その舟の中に一人の男。あの男が自分の最愛の人なのかも知れないと身を乗り出し、川の流れへ墜落してしまう —



講演会会場

“こだま”に関しては、諸説ある中で女性の声だというのが有力な説だそうで、ハイネが伝説をもとにそのまま詩を書いたことを考えると、前述のブレンターノの詩も、ハイネの最後の一節 — 波間に沈む人も舟も神怪（くすし）き魔歌（まがうた）謡（うた）うローレライ — も納得でした。

約一時間の講演の最後に先生の一言「実は私はまだそこに行ったことがないんです」とのご発言に、全員大爆笑。かくいう私も幾度となく愛するドイツのあちこちを訪れているのですが、瞠目すべきその岩に行ったことがないのであります。

♪♪ ♪♪♪♪ ♪♪

春のアフタヌーンコンサート

会員 松野美智子さんのヴァイオリン・リサイタル
をご案内します

日時 2014年3月3日（日）

13:30 開演開場（13:00開場）

会場 ミューザ川崎シンフォニーホール

市民交流室（4F音楽工房内）

ヴァイオリン 松野美智子

ピアノ 加納麻衣子

曲目 ベートーベン ヴァイオリン・ソナタ

第6番 作品30-1

竹内邦光 落梅集（無伴奏ヴァイオリンのために）

リヒャルト・シュトラウス ヴァイオリン
・ソナタ 作品18

チケット 全席自由 2,000円

お問い合わせ 松野 0467(32)7300

ミュンヘンから

湘南日独協会のホームページをご覧になられた、ミュンヘン在住の戸張通子さんより、メールが届きました。故宮下啓三先生のこと「歌で楽しむドイツ語」のことなどに触れられています。またご自分で長年取り組まれた天才ヴァイオリニストの研究と出版、さらにワーグナーに関する著作もあるそうです。ご関心をお持ちの方はどうぞ直接コンタクトして下さい。

湘南日独協会 様

突然のメールの失礼、お詫び申し上げます。

音楽家（声楽家）の戸張通子と申します。ドイツ在住44年、1985年にドイツ国籍を取得いたしました。貴「湘南日独協会」のホームページを読んでいますと、懐かしい宮下先生の写真が目に残りペンを持っています。私の記憶に間違えなければ、宮下先生は慶応大学で夜ドイツ語を教えていらっしゃいました。私はその生徒のひとつでした。宮下先生の思い出の会で、三宅芳子さんが「先生は珍しいものを見つけては持って来て下さいました」と仰られたそれに、この宮下先生は、私が学んだ先生だ、と確信いたしました。といいますのは、12月の初めドイツの子ども達が楽しむ Adventskalender を授業に 持ってきて下さったからです。私はそれまでそんな楽しいカレンダーがあるとは知らず、嬉しくなり、難しいドイツ語の勉強が、一気に楽しくなりました。それで、ドイツ語もドイツ音楽同様好きになりました。1990年、天才ヴァイオリニスト、アンリ マルトー を知り、彼の子女モナ リンズマイヤー夫人のご支援で、20年間調べあげ、日本語に翻訳致しました。そして2010年ショパン社より出版しました。

「歌で楽しみながらドイツ語を学ぶ」という素晴らしいアイデアの湘南日独協会さんの会員の方々は、きっとマルトーの伝記（各章に世に知られてないエピソードとそれを証明するような写真がいっぱい盛り込まれ、上記のAdventskalenderのように各章楽しめるように 仕上げました）を喜ばれるのでは、とご紹介いたします。、「歌で楽しむドイツ語」の会でお渡し 願えれば、幸いです。では、宜しくお願いの程お願い申し上げます。

敬具

戸張 通子 Michiko TOBARI Steinhauser Str.2 81677 Munchen/Germany Tel.Fax (089) 477024
E-Mail:Michiko.Tobari@T-online.de



戸張 通子

マルトー 大作曲家たちを虜にした世紀の大ヴァイオリニスト

Michiko Tobari:

„Marteau“ - Große Komponisten, gefesselt vom großen Violinisten

In japanischer Sprache

Verlag „Chopin“, Tokio 2010

375 Seiten mit 70 Fotos

18 Euro (1890 Yen)

ISBN978-4-88364-281-6

Das Buch ist erhältlich in München bei

„Bauer & Hieber“ Landschaftsstr., „Mikado“ Sendlingerstr.46

☆

☆

☆

☆



「ワーグナーをめぐる3人の女性 —— 生誕200年」に寄せて

「マルトー」著者 声楽家 戸張 通子（在独）

「ワーグナー」とは、自ら脚本を書きつけたオペラ作曲家、また可愛で自らの芸術を完成させた大音楽家。ワーグナー家と100年親戚づき合っているマルトー家長女、天才ヴァイオリニストの娘、モナ・リンズマイヤー夫人のワーグナー観である。彼女らの父アンリ・マルトー（1819-1934）は、8歳でワーグナーのオペラ「パルジファル」を作曲指揮で体験し、大音楽家になる決意をした。13歳でワーグナー指揮者ハリヒターからウィーンに招聘され、オヴァイオリニストとしてのスタートを切る。そして後年彼の名は世に知られるようになった。彼の母クララは、クララ・シュンにピアノを学んだピアノリストの女のドレスデンの実家にはシュン夫妻とともにR・ワーグナーが住んでいた。父チャール・フランスの工場を営み、家で「祝祭場」のひとりの。またカ

リンズマイヤー夫人100歳の誕生カード。『ワーグナー生誕100年』を記念してHans Prinzhornという画家が「パルジファル」

湘南日独協会創立15周年記念小岩井農場見学旅行



岩木山を背景に小岩井農場にて 後列右より二人目が上原勲氏

小岩井農場探訪記

会員 上原 勲

岩手・小岩井農場。そこは若き日からの小生の憧れの地であった。というのは嘗て新潟で友人となった若き獣医君から彼の農場実習体験を聞き及んでいたからであった。行ってみたい、という夢をなんとこの度湘南日独協会の皆さんとの旅が適えてくれた。

さて、旅の始まりは11月4日、東京駅に朝7時30分集合。参加者12名、早朝なのに時間厳守でよく集まったものだ。新幹線で談笑のうちに11時前に岩手の新花巻に到着。バスで紅葉の林に囲まれた宮澤賢治記念館へ。賢治の自筆原稿や多彩な資料を見学した。「雨にも負けず...」の詩しか知らなかったが、賢治は童話、宗教、科学はもちろん、絵画、音楽にも手を染め、もともと専門であった農業の指導まで実に多くの顔を持った人だったことにびっくりした。高台の記念館からは紅葉を縫う北上川の悠揚たる流れが眺められた。



宮澤賢治記念館

次いで新渡戸稲造の記念館へ。武将の家柄の出でありながらクリスチャンとなりアメリカ、ドイツにも留学。国際人、教育者としても名を馳せた人物がこの土地の産だとは。

次に訪れたのは「智恵子抄」で知られた高村光太郎記念館と彼の住まいであった。森を背に小さな建物が見えてきた。行ってみてびっくりした。建物の中に、更に小さな粗壁の小屋があった。狭い土間に囲炉裏のある六畳ほどの板敷きの一間。3畳半と説明されているが多分全面に畳を敷いたわけでもなかろう。そして彼の生活を偲ばせる若干の品々と壁には取り付け書棚。土間を挟み向かい側に竈、トイレ、それだけだった。

最初に目にした建物は小屋を保存するための鞘堂であった。さてさてこの主、嘗てはアメリカ、英仏に留学し、彫刻、音楽、絵画等の西洋芸術を飢え渇くが如く吸収し、新芸術を日本に紹介した人物の住まいとは！！妻の智恵子を亡くした後、空襲で東京の家を失い、この地に移り住み、6～7年畑を耕しながら地元の農民と共に生きたのだ。

貧しく朴訥とした東北に斯様に豊かな人物が生きていたとは驚きの発見だった。

この夜は盛岡の西、雫石町のホテルに宿泊した。さて次の日いよいよ小岩井農場訪問の日だ。南部富士とさえ呼ばれる優美な岩手山が碧空にスッキリ聳え、森の樹々は紅葉、また黄葉に輝いていた。小岩井。なんと響きのよい名前だ。由来を聞いて、そうだったのかと合点した。農場の創立者は小野義真（日本鉄道会社副社長）、岩崎彌之助（三菱社社長）、井上勝（鉄道庁長官）の三氏の名前の頭字を取って名付けられた。岩崎氏はなんと湘南日独協会の初代会長の岩崎英二郎さんの祖父に当たられる方であると知った3人の先人の夢と力の結集によって、岩手山麓の火山灰土で樹木も生えぬ広大な荒地を土壤改良し、植林をした。小岩井は今年で122年になるという。農場は1世紀以上の年月をかけて現在のように美しい牧場に仕上げられてきた。



農場風景

農場に着くとスタッフの方に迎えられた。まず案内されたのは一般には非公開の岩崎家の別荘だ。大正時代に建てられた瀟洒な純和風建築で、今日では貴重な遺産である。続いて農場内バスツアーである。若い女性スタッフの軽妙でユーモアあふれる説明を聞きながら小一時間のツアーを楽しんだ。農場の広いこと！9000坪の農場は森や林で区画されており、全体で東京山手線内の半分の広さだと聞いて魂消た。



農場内見学

明治36年に建てられた有形文化財の本部事務所（本社）を初め、要所要所に大きな牛舎や倉庫がある。積み上げられ、まーるくカバーに包まれた幾つもの干草の玉が広い草原に整然と並んでいた。そうすることで干草は発酵し、飼料としての栄養価が高まるとか。家畜排泄物を利用したバイオマス発電所まである。古い施設は大切に使い続けている。牛たちにストレスがかからないようにと配慮し、のびのびと過ごしている様子が印象的であった。ここには3千頭の乳牛の他、鶏を飼育して、各種乳製品、食肉、鶏卵を生産しているから驚く。チーズ、バターなど小岩井ブランドの乳製品はチョットお高めだが、小生の好物である。農場は他に山林事業や環境緑化、観光の仕事までしていると言うから牧場の仕事の裾野は広いとつくづく感心した。

観光客がゆったりできる広々とした「まきばの広場」のレストランで緑の広場を見渡しながらおいしい昼食をご馳走になった。この眺めの中で仲間たちと食事するひとは至福の時であった。

東北の秋は燃えていた。私たちの旅は東北の土に命を燃やした偉大な先人達に心ゆくまで出会えた旅だった。

この旅を呼びかけてくださった三谷さん、旅の中身を企画し、旅行中お世話くださった木原さんと大澤さん、そして現地でご案内くださった小岩井農牧の辰巳さん、そして旅の仲間たち。素晴らしい旅をありがとうございました。

以上



特別に閲覧を許された「聴禽荘」

私とドイツ (8)

私のベルリン暮らし

会員 辻川一徳



ベルリン時代の執務室での辻川一徳氏

「ベルリンへ移ってフジサンケイグループのオフィスを開設してほしい」と命じられたのは、1990年の初秋のことだった。その前年1989年の11月にベルリンの壁が崩壊し、統一ドイツの首都になるベルリンには、たくさんの日本企業が、いや世界各国の会社がいっせいに、オフィスを新設、あるいは強化しようとしていた。フジ・ニュースネットワークはボンに支局を置いていたが、こんどはベルリンに支局を構え、ドイツでの取材拠点を統合するという。当時フジテレビ・ロンドン支局長だった私は、ロンドン暮らしもう5年半、年齢も50歳代後半に入っていたし、今さら他の土地へ行けとは意外な内示だった。

ベルリンに引っ越したのはその年の11月末だったが、その前に10月3日の統一式典はぜひ見ておきたいと思い、私はベルリンへ行った。ニュース取材はボン特派員に任せ、私は一人の野次馬として旧帝国議会前の広場にいた。張られたロープの最前列で、歴史的な式典を遠目に見守った。たいへんな人出で、帰りは電車に乗ることなど到底できない。興奮さめやらぬ人々の中にもまれ、ホテルまでかなりの道のりを歩くうちに、私にもこれからこの町に住むのだという実感が湧いてきた。



ブランデンブルク門 当時門上の4頭立ての馬車は修復中

私と妻はそれからちょうど1年ベルリンで暮らした。その冬はベルリンでも5～6年ぶりという寒さで、零下10度を下回る日が2週間ほど続いた。その寒さの中を、私は外人登録のため外人局の前に、ポーランドから来た労働者たちにまじって2日ばかりで行列しなければならなかった。当時のベルリンは、にわかに流入する人々や会社に対応するインフラが整っておらず、まずオフィスや住まいを探すのがたいへんだった。結局クーダムに面したアデナウアー・プラッツのそばに産経新聞といっしょに働けるオフィスを見つけた。

住まいは西南のほうのダーレムに、立派な家の2階を借りることができた。当時、ベルリン日独センター（いまの日本大使館の建物）の日本側トップをつとめておられた織田会長のお宅と同じ通りだった。しかし電話を引くのがたいへんだった。大幅な需要増に工事が追いつかないとのことで、オフィスのほうはなんとか接続できたが、家のほうは1ヶ月以上かかるという。私は時差がある日本と常時連絡がとれなければ仕事にならない。そこで携帯電話をレンタルしたが、これが今日の携帯から見れば想像もつかないような代物で、大きさ・重さが普通の電話機以上。それに回線が込み合っていて、昼間はほとんどつながらない。夜や早朝に東京と通話すると、声が波のように大きくなったり小さくなったりした。

私のドイツ語は学生時代に専攻したものの、30数年をへてさびついており、仕事にはとても役立たない。助手に頼るしかなかった。私の最初の助手になったのはフォルカーという旧東ベルリンの男で、モスクワ国際大学に留学して日本語を学んだという経歴の持ち主だった。彼と「お互いの勉強のため、一日のうち1時間はドイツ語で、1時間は日本語で話そうね」と約束したのだが、彼の日本語はかなりあやしく、そのうち互いにもどかしくて、会話は英語になってしまった。フォルカーは旧東独のエリートというイメージとは程遠い、じつに誠実で心の温かい男で、いまでも友人として親しくつきあっている。

数ヶ月の間にベルリンはみるみる変わって行った。当初、旧西ベルリンから東ベルリンへ車で入ると、目をつぶっていてもすぐにわかった。とたんに道がでこぼこになるからだったが、それが日に日に平らになり、東側の町もどんどん整備されていった。その変化を観察しながら過ごした1年はほんとうに印象深いものだった。



大家さんの家の庭で大家さん夫妻・愛犬と

私はベルリンについてのいろんな本を読んで勉強し、ここは凄絶な歴史の変遷の舞台だったのだと改めて感じた。そして壁の周辺にまだ残っていた無人地帯やヒトラーが自殺した防空壕跡、ブランデンブルク門のそばの西側に脱出しようとして殺された人々の墓碑などを眺めると、ベルリンという町は、そこに暮らしていた人たちの情念がたちこめていて、大げさにいえば、空気さえ濃密なところだという思いがした。



凍結したグルーネヴァルと湖

しかし一方ベルリンは、実に美しい町でもあった。私の家のそばには広大なベルリンの森が広がっていて、私たちはよくグルーネヴァルト湖まで散歩した。大寒波のあとの湖は完全に凍結し、若者たちが湖面の雪を掃き寄せてスケートを楽しんでいた。乳母車を押して犬をつれた女性が湖面を渡っていく。よくヨーロッパのクリスマスカードで見た風景がそのまま私の眼前にあった。雪の日も、大家さんの庭の巨木を赤リスが駆け回る。その裸木からやがて拳のようにたくましく盛り上がってきたのはマロニエの葉だった。初夏にはみごとな花が咲き誇り、私たちはヴァンゼーの湖畔のレストランに出かけては季節の味シュバルゲル（アスパラガス）を堪能した。

進学のためロンドンから帰国させていた子供たちが夏休みでやってきたころはほんとうに楽しかった。秋に帰国が決まった私たちを送ってくれたのはティーアガルテンの油絵のような美しい紅葉だった。1970年代にBBCに出向していた時代と併せ、通算8年半住んだロンドンに比べて、私のベルリン滞在は1年と短かったが、非常に濃厚な体験をしたような気がする。ベルリンを思い出すと、なぜか胸がキュンとなるのだ。



ブレジネフとホネッカーがキスをする落書きのあるベルリンの壁の前で、当時高校生の筆者の子息

ドイツ旅行のお知らせ

公益財団法人日独協会（東京）主催の「2014年全ドイツ・独日協会連合会出席旅行」の詳細が発表され参加者の募集が開始されましたので、概略をお知らせします。なお、旅行には湘南日独協会織田会長が旅行団のスタッフとして参加予定です。

出発 5月28日（水）成田発

デュッセルドルフ着

宿泊はデュッセルドルフのみで移動はなし。

帰国 6月5日（木）デュッセルドルフ発

6日（金）成田着

デュッセルドルフでの主なプログラム（自由参加）

5月29日 ラインクルーズで遺跡見学日帰り

30日 独日協会連合会総会

日本大使招聘夕食会

31日 独日協会総会と半日ツアー

6月 1日 ケルン世界遺産見学

2日 アーヘン、インデン訪問

3日 ケルンの世界的企業訪問

4日 エネルギー効率利用の視察

旅行代金 320,000円（2名様の一室利用）

一人部屋利用追加41,000円

申込締め切り 2014年1月31日

お申込み・お問合せ先

東日観光株式会社 企画開発室 担当 阿部仁

藤沢国際交流フェスティバルへ参加

10月10日開催された藤沢国際交流フェスティバルへ参加、メインの通路に面してブースを設置しドイツとの交流等の活動をPRしました。

子どもたちも立ち寄り「ソーセージの美味しい国はどこですか?」「ドイツ!」スタンプラリーに参加していました。



☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆

2013年望年会開催

12月21日(土) 天気に恵まれた遅い午後、藤沢のイザヴィーノを貸し切り恒例の望年会が開催され店内一杯に30余名が陽気に楽しい一時を過ごしました。

岩崎先生のお話はパソコンがテーマ。瞬時にパソコンに消えた大事な論文の原稿が救い出された、当日に発生した事件でした。

当日はシャンペン、日本酒、焼酎にお菓子の持ち込み、店内のワインの飲み放題で大いに盛り上がり、SWZ(歌で楽しむドイツ語)の仲間、アムゼル団員と全員歌いきり、2015年への誓いを新たにしました。

お世話役の大澤さん、伊藤さん有難うございました。



皆さん大きな声で



スピーチされる岩崎先生



アムゼルの皆さんと



SWZのメンバーの皆さんと

編集後記

○創立15周年が終わり、新たな2014年を迎えました。湘南日独協会は地域にすっかり根を下ろしたようです。秋のオクトーバーフェスト、鎌倉と藤沢の国際交流フェスティバル、毎月開催される例会、ドイツ語講座、歌で楽しむドイツ語そして合唱団アムゼルの活動、それぞれが今年はどんな展開を見せるか楽しみです。

○今年の秋にはワイマール日独協会の皆さんが来訪予定です。歓迎準備を間もなく始めることになるでしょう。ホームページの反響も今回掲載しました。ホームページは寺田理事にお願いしていますがより良い内容に皆様の感想希望もお寄せください。

○15周年記念特集号はこの第Ⅲ号で終了し、次号よりは通常の編集になる予定です。皆さんの一層のご支援ご協力をお願い致します。

大久保 (8)

★★湘南日独協会ホームページ★★
<http://jdg-schonon.ciao.jp/>